

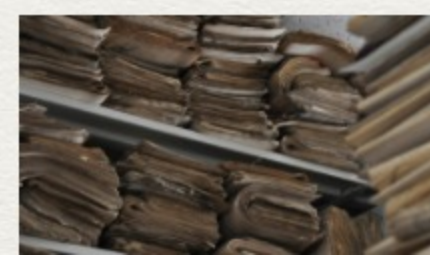
飯山 由貴



▶ hidden names

2014、2021、ビデオ (25分12秒)

© liyama Yuki





▶ あなたの本当の家を探しに行く

2013、ビデオ (33分41秒)

© liyama Yuki



あなたの本当の家を探しに行く

10月24日夜

「この家はわたしの本当の家じゃない」と泣き出して、もう線のきれいでいる電話から、「本当の家」に電話をかけようとする。

「本当の家」を探しにパジャマで外に出ようとするので、暗い庭先で、今日は雨が降っているから天気の良い日に行こうと声をかける。

一緒に「本当の家」を探したい気持ちになるが、母が顔をしかめて首を横に振るのであきらめる。

確かに明日は仕事もあるし、外は寒そうだしこういうときどういう対応をしたらいいのかいつもわからない。

では、わたしたちがいま暮らしているのはいったい「どこ」なんだろうか。

11月18日夜

あなたの本当の家を探しにいってみよう。

幻聴や幻覚をもつ家族が具合が悪くなったとき、わたしたち家族は多少うんざりしつつ、戸惑いつつ、落ち着くのを待つ。彼女は どうしてこうなるのか考える、さっきの会話が気に障ったんだろうかと。それもあるのかもしれないが、傍目には何もなくても具合が悪くなる時もある。よくわからない。彼女はあの有名なアーティストのように自分に見える物を絵画にしたりはできない。「アウトサイダー・アート」とよばれる芸術の展覧会が開かれていたりするけれど、精神に障害（この言葉はあまりつかいたくないが）を持つ人が、幻覚や幻聴を「表現」できること自体がもしかしたら希有なことで、表現の仕方もうまく見つからないまま、投薬し生活している人のほうが大多数なのかもしれない。私自身は大学で絵を描いたり造形する人に囲まれて生活していたから、感覚が麻痺していたんだと思う。だれでも何かしら作ったりできると思いこんでいたが、そうでもなくて、できることできないことが人それぞれあると、妹と数年ぶりに一緒に暮らしてみte気づく。そして、それを互いに補うことができることも。

彼女が具合が悪くなったときに語る言葉は不思議だ。あの日は、ずっと自分が生まれ育った家に暮らしているのに「本当の家」を探しに外に出かけようとした。いったんその世界に入ると、家族がかける言葉は彼女に届いているのかよくわからないし、とても強い力で行動するので3人がかりで引き止める。引き止められないときもある。そもそもそのときの彼女の記憶とか経験はどうなっているのだろう。彼女の言葉を本当にやってみたら、なにかわかるのだろうか。家族のひとは「言うこと聞かないとまた入院させるよ」とつい言葉がでてしまうくらい、老人と病人と一緒に暮らすことに疲れている。たぶんそんな家族はほかにも沢山いるんだろう。わたしたちが暮らす街は田舎なせいか、すぐに入院できる病院は、患者が幻聴や幻覚の症状がでると何をするかわからないし、スタッフの目が行き届かないという理由で保護室に入れる。（都会の病院がどうかは知らない。）保護室というのは、あばれたり幻覚をみたりすると入れられる部屋で、そこにはなにもないそうだ。彼女の主治医もたまに「入院したいんですか?」と、圧力をかける意味でその言葉を使う。

(しかし後で、あのときこう言われてつらかった、と話したら、決して脅したりしたわけじゃない、そういうふうに聞こえたなら悪かった、と主治医は謝ったそうだ。)しかし、それではまるで、幻聴や幻覚があること自体が罪のようだ。彼女は父母が死んだあと1人で生きていけるのか不安に思っている。わたしは「八月の鯨」のように暮らそうよと朝ごはんを食べながら声をかける。これですこしは不安が収まるのだろうかと思いながら。わたしがいつか家族とはなれて暮らしても、老人になったら同じく老人の彼女と一緒に暮らすだろう。投薬以外の、人生におけるなにかが、精神の病気を持つ人間に強く影響するのはなんとなくわかる。恋とか友達とか夢とか趣味とか。言葉にすると陳腐だけど。彼女は家と病院とコンビニとショッピングモールが生活圏で、デイケアに行けるようになることが、ここ数年の彼女の目標だ。彼女に、人生におけるなにか、が、いつおきるのか、わたしも待っている。でもいま、わたしたちはこうやって一緒にはみ出すこともできる。

CURATOR'S NOTE

《hidden names》（2014、2021年）は、黎明期の日本の精神医療について調査研究を続ける鈴木晃仁博士へのインタビューである。ここから見えてくるのは、世界の趨勢とは対照的に、私宅監置から措置入院まで、さまざまな形で精神病患者の存在を社会から排除してきた日本の精神医療の歴史である。そして《あなたの本当の家を探しに行く》（2013年）は、ある夜、「これは私の本当の家じゃない」と言って自宅を出て行こうとする妹に、飯山が付き従い、夜の街で彼女の本当の家を求め歩いた日の記録である。最後に妹が探し当てた「本当の家」とはどこだったのか？

これらの作品は、ここでは最新作から旧作の順に提示される。飯山にとっての出発点は、もっとも近くにいながら、精神的な病のために理解し合うことに困難を感じてきた妹との関係について考えることであり、そこから日本の精神医療の歴史や、日本の社会がどのように「他者」を作り上げてきたのか、という問題へと思考を拡げていった。しかし鑑賞者は逆に、社会や歴史の問題から、飯山由貴という一人の人間の経験と思考に向かって、距離を縮めるような鑑賞体験をすることになるのである。

(K.E.)

CREDITS

hidden names

監督・編集

飯山由貴

講義

鈴木晃仁

翻訳

ジョナサン・ロイド・オーエン

謝辞

小峯研究所

Online Version re-edited in 2021.

あなたの本当の家を探しに行く

監督・編集

飯山由貴

対話と撮影

飯山千夏 飯山由貴

翻訳

岸本紗奈

PROFILE



© 金川晋吾

飯山 由貴 (いいやま・ゆき)

1988年、神奈川県生まれ、東京都を拠点に活動。

個人の生活や経験・記憶を、インタビューや記録資料の研究などを通じてたどり、歴史や社会といった大きな文脈との関係性を見つめる映像作品やインスタレーションを発表している。本展出品の、精神疾患を抱える妹との間で、コミュニケーションの再生を試みた作品《あなたの本当の家をさがしに行く》を起点に、近代日本の精神医療の歴史と課題を追った一連の作品群は、近年の代表的シリーズである。

2015年、愛知県美術館APMoA Projectにて個展開催。主なグループ展に、「ヨコハマトリエンナーレ2020」（神奈川、2020）、「コンニチハ技術トシテノ美術」（せんだいメディアテーク、宮城、2017）、「歴史する！ Doing history!」（福岡市美術館、福岡、2016）、など。

Website [🔗](#)

小泉 明郎



自由ノ暗示催眠実験

2021、鑑賞者の意識、実験の音声、インストラクション、アンケート (21分11秒)

© KOIZUMI Meiro

CURATOR'S NOTE

本作は、催眠術師・研究者の漆原正貴氏とのコラボレーションにより制作された、世界中の鑑賞者が参加可能なオンライン・パフォーマンス作品である。鑑賞者は「鏡で自分の顔を見ること」など小泉の指示に従い特定の環境で催眠暗示を聞きながら、あるパフォーマンスをすることが求められる。そのパフォーマンスを介して自身が催眠にかかるか否かを試すことが期待されている。

作家は漆原氏の催眠を体験し氏との対話から催眠状態を認知の「バグ」だと理解。本作を「自由に関する催眠実験」と位置付け、物理的制限を課されている今日の私たちが凝り固まった世界観や人間観から少しだけ解き放たれるきっかけになることを試み

る。自粛や遠慮など自らを抑制することが日常の一部となっている日本のコロナの禍を背景に、人間の精神的自由やこの「自由」という状態が内包する矛盾、さらに人間の認知のメカニズムにおける言語の役割について一考を促すのである。

なお、本作はサウンドだけでは成立せず、実験体験者の意識自体が作品の素材となる。ぜひ、あなたの意識というメディウムの潜在性に気づいていただければと思う。
(K.K.)

*本作はみなさんが催眠術にかかる可能性があるものです。ご自身の責任で体験することをお願いいたします。



INTRODUCTION

これは催眠術師・研究者である漆原正貴氏と共に作られた、催眠に対する感受性を測るための催眠実験です。次項のインストラクションに従い催眠セッションを体験していただき、セッション後は「催眠感受性を測るアンケート」にご自身の体験を記入してください。アンケートの集計結果は、展覧会期中随時更新されていきます。

催眠という言葉からは、怪しげな催眠術師によって心身を勝手に操作されるような、非科学的な魔術を想像されるかもしれませんが。しかしそれは古典的な催眠のイメージです。近年の催眠研究では、催眠とは催眠術師の神秘的な能力によるものではなく、個人が誰でも持つ能力によるものだと、認識されるようになりました。私たち人間は、自分が思っている以上に柔軟に現実を変容させる能力を持っているようです。催眠とはあなたの意識の働きの中に起こる小さな現象です。その催眠のわかりやすさには個人差があり、体験は千差万別で、個人によって濃淡が生まれま

このセッション内ではさまざまな催眠暗示が展開されますが、漆原氏の想定以上の変化を体験する人が出てくるかもしれません。また逆に、全く「かからない」と感じてしまう人も中にはいるでしょう。しかし、全く「かからない」と感じてしまっても、ちょっとした違和感を感じることはあるかもしれません。その不思議な小さな違和感こそが、催眠状態への入り口となります。また催眠は繰り返すことによって、「コツ」を掴み、かかりやすくなっていく傾向にあります。ご興味のある方は是非繰り返し体験して、催眠状態への入り口を探してみてください。

閉塞感の漂う今日、この実験によって一人でも救われた気分になる人が増えることを願っています。

小泉明郎

INSTRUCTION

以下を参照しながら、リラックスして実験に臨める環境をご準備の上、セッションを体験してください。



1) 環境

一人で体験してください。約20分のセッション中は、他者の干渉がないようにしてください。

2) 鏡

顔の全体が入る大きさの、自立型の鏡を用意し、机の上に置いてください。鏡以外に意識が向かないよう、鏡は自身に近づけて設置してください。

3) スピーカー

音声はスピーカーを使い、少し大きめの音量で聴いてください。スピーカーが用意できない場合は、イヤホンを片耳だけ付けて体験してください。その際に、付けていない方のイヤホンのコードが集中を邪魔しないように工夫して固定してください。

4) 携帯、コンピューター、その他

実験の妨げとなるようなものは、なるべく視界に入らないようにしてください。携帯電話は電源を切り、コンピューター画面も、視界に入らない位置に遠ざけてください。部屋の電気など光を発するものも、鏡越しに目に入れないようにしてください。

CAUTION

- ・ 催眠では自分が望まないことは体験しませんので、安心して試してみてください。
- ・ 約20分間のセッションの最後に催眠術師によって催眠が完全に解かれますので、それまではセッションを中断しないでください。
- ・ 万が一、気分が悪くなったり、途中でやめたい場合には、両手を握ったり開いたりすることを繰り返して下さい。催眠を解くことができます。

ここから実験音声をダウンロードしてください。

DOWNLOAD

↓ 自由ノ暗示催眠実験 (36MB、約21分)

© KOIZUMI Meiro

体験後は催眠感受性を測るアンケートにご協力ください。

- ・ [アンケート回答ページ](#)
- ・ [アンケート集計結果ページ](#)

CREDITS

催眠術協力・アドバイス・実験設計

漆原正貴

コーディネーター

坂田太郎

英語版音声

山田カイル

録音

藤口諒太

Courtesy: Annet Gelink Gallery (Amsterdam) & MUJIN-TO

Production (Tokyo)

PROFILE



photo: Matadero Madrid/Photo: Bego Solís

小泉 明郎（こいずみ・めいろう）

1976年群馬県生まれ。現在、神奈川県在住。国家や共同体と個人の関係について批評性の高い映像作品を制作し、戦争や大震災の記憶やトラウマ、皇室、社会に潜む闇や狂気等を主題に扱ってきた。暴力や自己犠牲の感情が生まれるメカニズムや、人間の身体と感情の関係について、考察するものも多い。インタビュー映像を用いて、当事者たちの感情を追体験させる演劇的な映像は、現実と虚構が交錯する。近年では、サウンド作品やVRを使った作品も手掛け、表現方法が広がっている。

主な展覧会やフェスティバルに、「シアターコモンズ'21」（東京、2021）、「あいちトリエンナーレ2019」（愛知、2019）、「上海ビエンナーレ2018」（上海、2018）、個展「捕らわれた声は静寂の夢を見る」（アーツ前橋、群馬、2015）、個展「プロジェクト・シリーズ99：小泉明郎」（ニューヨーク近代美術館、ニューヨーク、2013）など。

Website [🔗](#)